

2022年2月6日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「命のパンを頂こう」

聖書：ヨハネによる福音書6：1～15

イエスは、あとを追ってくる群衆に何が必要とされているのかと弟子を試みる。フィリポに対しイエスは問う。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と。フィリポは「二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。二百デナリオンとは数百万になる相当な額。実際に二百デナリオンでパンを買えば十分に足りる額ではある。でも、「二百デナリオン分のパンでは足りない」と答えたのは、群衆に対する本来の飢え渴きは、そんなもので満たされるものではないと感じ取ったということかと思う。イエスは大勢の群衆を見て命のパンの出来事へと進む。マルコ福音書では、この時の群衆は「飼い主のいない羊のような有様」（マルコ6：34）と記され、群衆への「憐れみ」（マルコ6：34）として見つめるイエスを描く。その群衆は、この世の社会情勢の中で国家権力に不自由を強いられ、抑圧の中で生きざるを得ない状況に立たされていた人々。その現状の中で真の王を求めて、イエスのあとを追う群衆であった。

抑圧の中で生きざるを得ない国や地域に生きる人々は、いまだ多くいる。先週、2月1日はミャンマーで起きた国軍クーデターから1年となるが、沖縄在住のミャンマー人会が昨年5月からミャンマー写真パネル展示会を那覇市安里の栄町市場のほうで開催し、現状を共有している。トウヤソウ事務局長は「1年経ってもいまだに軍に殺される人や家を奪われる人がいる。国際社会として何ができるか、日本にも考えてほしい」と呼び掛けた。今は写真展は終わっているが、そこはまた、ミャンマー料理を提供する食堂もやっている。ぜひ、そこに行ってミャンマー料理を食べながら、この問題を共に考えることが出来たら、良き分かち合いの場に、慰め、励ましの場になろうかと思う。

主イエスは、この世の社会情勢の中で、国家権力に不自由を強いられ、抑圧の中で生きざるを得ない状況にある人々を「憐れみ」、その人々を神は見ておられ、そしてその人々と食を共にして行くお方である。

「命のパン」とは何か？ それは、人が人として生きる希望を持ち続け、人としての誇り、愛されているという喜び。イエスが与えようとされる命のパンとは、そういうものではないかと思う。どのような社会状況に置かれても、人は愛される存在であり、生きていい存在であると。私たちも、イエスのなさった不思議なパンのしるしを見るために、ミャンマー料理を食べに行きたいと思う。イエスの言う命のパンを頂きたい。（神谷）